

## 「グリーン・ファーザー 杉山龍丸」のインド緑化の時代 ～日印両国関係と世界情勢～

宮原豊 (9 組)

インド関係の投稿を続けておりますので、皆さんにはまたかと思われるかもしれませんが。

「知る人ぞ知る」とは言え、インドに遺したその偉業に比べると世の中に「杉山龍丸」を知る人は少ないです。65 期同期会「蕨の会」の群馬県沼田市旅行中に龍丸の話題を何気なく話したところ、関賢治君 (2 組) から思わぬ反応があったのに驚き、それに勇気付けられて今回これを投稿します。関君は「知る人」でした。テレビで観てネットで調べたそうです。

杉山龍丸の長男・満丸氏 (福岡県在住) と知り合ったのは、私がインドから帰国して 10 年を過ぎた 2~3 年前のことで、満丸氏は高校教師を定年退職した頃のことでした。正直に言えば、私は杉山龍丸のことをあまり知りませんでした。その後龍丸について放映されたテレビ番組や龍丸の残した膨大な資料や著書をあれこれ渉猟し、杉山龍丸とは何者で何を為した人物なのか探求し始め、その偉業について確かな手応えを掴むことができました。一般に杉山龍丸のことがあまり知られていない理由のひとつは龍丸の真っ正直な性格と「わが道を行く」式の行動様式に寄るところも大きいですが、客観的に言えば龍丸が生きた時代背景を知ることが必要だと考え、その時代のインドと日本の歴史、日印関係史、そして日印両国を取り巻く世界情勢について調べ、1 年前から開催準備されてきた東京での第 6 回「夢野久作と杉山三代研究会」(2018 年 3 月 17 日、拓殖大学) において発表しました。



2017 年 3 月 28 日拓殖大学渡辺利夫元総長・元学長 (右から 3 人目) を囲んで、左から 2 人目が杉山満丸氏、筆者は右から 2 人目。

杉山龍丸は 1919 年 (大正 8 年) 生まれ。父・泰道 (夢野久作) は奇書「ドグラ・マグラ」(昭和 10 年発表) で知られる小説家。祖父・茂丸は伊藤博文の懐刀とも謂われた政界の大立者。16 歳で祖父と父をほぼ同時に亡くした龍丸は陸軍技術将校として終戦を迎え、戦後 1951 年 (昭和 26 年)、龍丸 32 歳の時に戦友・佐藤某と東京の街角で偶然再会しました。佐藤はインド・ブッダガヤの日本山妙法寺・藤井日達師の下で働いていて、その時にインドの青年を同行しておりました。そこで佐藤からインドを支援してほしいと依頼されたことが龍丸のインドとかかわる切っ掛けとなりました。1955 年からガンヂー塾の青年たちを研修生として福岡の杉山農園に受入れていたのが縁で、龍丸はインド政府の要請を受け 1962 年にインドを初訪問。その時の縁でデリー北部パンジャブ州の植林に取り組みました。

杉山龍丸は、60 年代 (62 年~70 年まで) に 6 回インドを訪問。パンジャブ州、ビハール州、UP 州、グジャラート州は毎回訪れ、そして次にマハラシュトラ州、更には南のケララ州、タミールナド州も訪問しており、足を踏み入っていない州はほとんどないというくらい

に、それも1回の滞在期間は短い時でも2~3ヶ月、長い時は5~6ヶ月に及び、広大なインド各地をかなり詳しく踏破しています。

70年代にも何回もインドを訪問し砂漠緑化に尽力することになりますが、特にシュワリック・レンジと呼ばれる砂質の地層崩落地帯の緑化に貢献しました。それらの事業をほぼ個人資産を取り崩して資金捻出して実行したのですが、70年代半ば以降に国連等でインドでの砂漠緑化の経験や方法論が評価され始め、アフリカや中南米などインド以外の地域での砂漠緑化にも取り組むことが期待されていた1985年に夢半ばにして病に倒れ、87年に68歳で他界しました。

#### 【龍丸の生きた時代の日印関係】

龍丸がインドで活躍した1950年~80年代の日本とインドの歴史を見てみましょう。

- ① 日本は1951年サンフランシスコ講和条約締結によりようやく国際舞台に復帰。インドは47年に独立し、50年に共和国として歩み始めた。1950年~1962年までの日本とインドは「蜜月時代」にあった。49年ネルー首相は、日本の子供たちのためにインディラという自分の娘の名を付した小象を寄贈。51年の第1回アジア大会がデリーで開催された時、日本はGHQ占領下だったが、国際舞台で初めて日章旗を掲げた。
  - ・57年には岸首相が訪印し、同年にネルー首相が訪日し、その後日本の対外経済援助の主流となる「円借款（円クレ）」の第1号がインドに貸与された。当時日本にとって鉄鉱石は工業発展に必要不可欠であったが、オーストラリアは旧敵国には売れないと禁輸していたのとは大違いで、インドは高品質な鉄鋼石を日本に供給した。当時、日本に鉄鉱石を供給してくれる国はインドだけだったが、ネルー首相の政治的決断により日本はインドから大量の良質な鉄鉱石を長期的に確保できた。もしインドの鉄鉱石がなかったならば、戦後の日本経済のその後の発展はなく、日本にとってインドはまさに救世主であった。
  - ・58年にプラサド大統領が訪日、60年には皇太子殿下・同妃殿下（今上天皇・皇后両陛下）が訪印、61年に池田勇人首相が訪印。ちなみに、2013年12月に天皇・皇后両陛下は53年ぶりにインドを再訪されました。
- ② ネルー首相率いるインドは、東西冷戦構造が深刻化する中で、53年コロンボ会議、61年非同盟諸国会議（ベルグラード）等の国際政治の舞台で非同盟諸国の盟主としての存在感を増していった。
  - ・米国はそのようなインドを嫌い、そのためにインドは（非同盟と言いながら）ソ連寄りになった。日本は対米追従を余儀なくされているために、日印は「普通の二国間関係」になってしまった。どんな関係か。友好的でないわけではなく敵対するわけでもなく、関係が悪いわけでもないのに他人同士のように知らんぷり、そんな関係である。
- ③ そのような2国間関係は62年頃から80年代中頃まで続き、日印間の“空白の20年間”

と言えるが、皮肉にもこの時期がインドで杉山龍丸が最も活発に活動した時代である。

今、日印両国は二国間関係としては最も重要な関係とお互いに認識する緊密な関係を維持しているが、その昔、日印の蜜月時代は短く、東西冷戦構造下で 20 年間も普通の二国間関係になってしまった。その時代、日本は米国追随せざるを得なかったとしても（独自外交とまで言わないまでも）、インドとはもっと緊密な関係を続けることは可能だったのではないか。

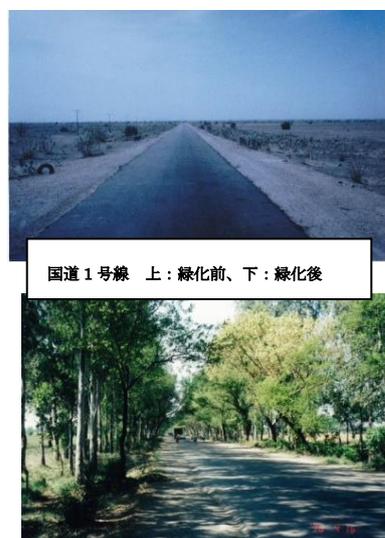
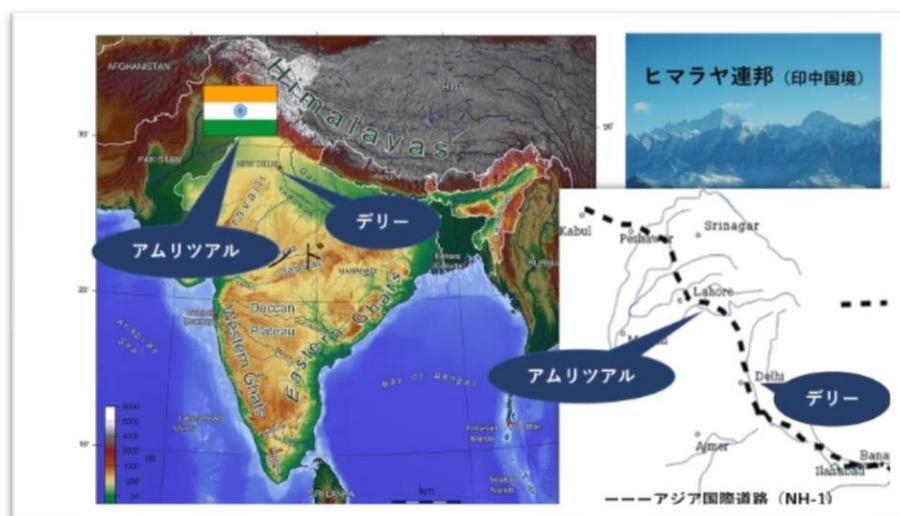
1970 年代のことですが、私はジェット口で海外からのビジネス・インクワイアリー（輸出入の引合情報）取次の仕事をしていましたが、中でもインドから数多くの問合せがありました。ところが、インドへの貿易斡旋は要注意だと言われました。それは、西側諸国は対共産圏禁輸措置（ココム）という条約を結んでいて、工作機械、精密機械、光学機械等の先端技術製品は、インド到着後に直行でソ連圏に横流しされると疑われていたからです。1971 年、印ソ友好協力条約が締結され、インドは日本からますます遠い国になりました。一方で、その頃日本は中国との国交正常化で湧き上がっていました。

#### 【杉山龍丸がインドに遺したもの】

杉山龍丸がインドに遺したものは、次の 3 点です。

- ①デリーから北へ向かう国道 1 号線沿道の植林（ユーカリ立って植林）を実現。それが 470 キロの沿道の緑化につながり、ユーカリが地下水を吸い上げ周辺が農耕可能になった。
- ②インドで台湾の蓬莱米栽培に成功、米穀の増産に貢献。
- ③北インド砂漠地帯シュワリック・レンジの緑化に貢献。

龍丸が街路樹を植林したデリーとパンジャブ州のアムリツアル（パキスタン国境）を結ぶ国道 1 号線（NH1=アジア・ハイウェイと言われる国際道路）にほぼ平行に、ヒマラヤの裾野ネパール国境の南端にシュワリック・レンジと呼ばれる地層崩落地帯が北西から東に続いています。シュワリック・レンジはインド亜大陸がユーラシア大陸に突っ込んでいった時



にできた砂質の地層崩落地帯ですが、東西 2000 キロ以上に亘っています。この地帯の土砂崩落を止めるのは誰もが不可能だと言っていたが、龍丸は「不可能と思わなければ全て可能である」と植林に挑戦し、今では見事に緑の大地になっています。野生の茨を使い、場所によっては人工的な土止めをつくり、雨期の前にそこに一斉にインド原産のモリंगा・オリファラ等の植樹をすることによって緑化しました。

龍丸がインドのために大きな貢献したのは人材育成で、龍丸のような日本人がインドのために献身的に働いてくれたことを人々が記憶してくれているから、底流としてインド人の日本や日本人に対する好意的な感情が続いているのだと感じます。龍丸の受け入れたインド人留学生・研修生の研修分野は、陶器、漆器、和紙、織物（博多織、久留米絣）、染色、工芸（木工、竹細工、漆、藁細工）、農器具などで、その頃インドが関心を抱いていた日本式農業や日本の地域に残されていた伝統産業・工芸の広範囲にわたる指導が行われました。

龍丸はあらゆる機会に、『『インドの民衆の自立』のために協力した。インドの緑化のために働いてきたが、緑化を成功させたのはインドの人々であり、自分は民衆の自立のためにお手伝いをしてきたのだ』と言っています。龍丸の提案で成し遂げた国道 1 号線のユーカリ植林やシュワリック・レンジの植樹は、雨期の直前に「人海戦術」で一斉に行うことが肝要で、「大衆動員はインド人自身の自覚であり」、人々が一丸となって事業に参画したのは、ガンディーを尊崇する後継者たちがいたからだと考えられます。

#### 【世界の砂漠緑化に挑戦】

ここまでの杉山龍丸のインドでの活躍はテレビ番組でも紹介されましたが、私が特に強い関心を持ったのは、それ以降の今まであまり発表されていない内容です。インドで培ってきた緑化成功の経験を基礎に、龍丸の活動の方向はインドだけにとどまらず、広く世界に向けて積極的に情報発信しました。

龍丸の国際連合との関係は、1960 年代後半にインドの飢餓問題解決を国連に訴えたことに始まるが、その頃ローマクラブが地球環境について警鐘を鳴らし、国連も地球環境問題に高い関心を払い始めました。72 年国連人間環境会議（ストックホルム）を開催、ナイロビを本部として国連環境計画（UNEP）が設立され、77 年 9 月に国際砂漠化防止会議（国連レベルで初の砂漠問題の会議）がナイロビで開催されました。

この会議には日本は福田仁志博士（東大名誉教授）を団長とする代表団が派遣しますが、日本は海外での砂漠防止の経験も実績もないことから、「インドで 15 年間の実績のある『杉山龍丸の砂漠緑化』を発表したい」との要請を受けて、龍丸は資料提供しました。古くから龍丸と親しいモラルジー・デサイ首相（ガンディーを崇拝する政治家）からのレターに、「この会議に出席していた日本代表団が提案していた植林・土壌・水管理に関する意見を参考にして、今後は日本政府とも相談しながら進めるつもりである」として記録されています。しかし、この段階では日本政府の協力は得られなかったと思われます。

その後も龍丸は世界に向けて砂漠緑化の具体的な方法論を提案し続け、それが実際的な手法であると評価されて龍丸は 1984 年にオーストラリア（アデレード）で開催された第 2 回世界砂漠会議に出席要請を受けました。龍丸のインドでの砂漠緑化の取り組みが先駆的なものであると、その実績や研究内容、そしてそれが唯一の具体的で実現可能な方法論であると称賛する UNEP やローマクラブのメンバーからの手紙が「杉山龍丸氏関連資料アーカイブ」に残されています。

この 84 年の第 2 回会議に主催者から出席要請を受けた龍丸は、日本政府に派遣協力を依頼するが、「役人でも学者でもない者が国際会議に出席することは控えてほしい」とまで言われ、やむなく個人の資格で参加したそうです。あくまでも憶測ですが、その頃の日本は政府も産業界も地球環境問題に対する方針をどうするか腹が決まっていませんでした。「国際世論に反対はできないが、積極的な姿勢は示すことは得策でなない。しばらく様子見しよう」と駆け引きをしていたのか、その会議に日本政府は代表団すら送らず、その対応振りはナイロビ会議の時よりも後退しているように見えます。その方針は 92 年のリオデジャネイロの地球サミット（そこで砂漠化対処条約に関する政府間交渉も始まった）まで続き、その後 97 年に日本で開催された会議で、主催国としての義務感からか日本のイニシャティブで合意された京都議定書（COP3）につながっています。

杉山龍丸のことを研究していて印象的かつ驚かされるのは、「杉山龍丸の持つ現場力と実践力」です。その実践は「科学的知識に基づく研究・経験の上に、鋭い直観力で方向性を定めて奮闘」、「粘り強い信念と継続する熱意」、そして「それに巨額の個人資産を注ぎ込んでまで実行する決意」にはただ驚嘆します。

1977 年～79 年にインド首相を務めたデサイ首相との間で交わされた膨大な文書類は歴史的に貴重なものであります。龍丸は 1962 年にインドを初訪問する以前から、ネルー政権時のデサイ大蔵大臣と親しくしており、インド農村の改革に尽力した同志的な間柄でありました。

杉山龍丸は「世界の砂漠緑化」について情報発信し続け、国際砂漠緑化協会や国際砂漠緑化訓練センター設立構想に尽力し、世界の「砂漠緑化に挑戦」しました。海外での高い評価にも拘わらず結果は必ずしも芳しいものとは言えず、1985 年に道半ばにして脳溢血で倒れ、87 年に 68 歳で人生の幕を閉じました。

#### 【龍丸の功績を後世にどのように伝えるか】

杉山龍丸の長男・満丸氏の「グリーン・ファーザー」（2001 年発行）の英語版「Green Father」が 2013 年に発行されました。「グリーン・ファーザー」の英語版発行を企画したインド在住の HN さんが、事前に現地に関係



者へのインタビュー調査を試みたのは2011年のことで、龍丸没後24年、KBC九州朝日放送が現地取材した1998年からでも13年が経過していました。龍丸の親しくしていたパンジャブ州のスシル・クマール氏はその頃には老齢のため現地を離れており、その後死去したとのこと。彼等が活動の拠点にしていた学校や農業研究所等々で働いていた人々も今はなく、世代交代が進んでいて、杉山龍丸の名前を知る人も少なくなっているようです。

2015年に現地を訪れたTTさんの話では、スクラマジラ村では、満丸氏が訪問した時（1998年）と一緒に写真に写っている村長に抱かれた孫が家を継いでいて、「杉山龍丸さんの協力で緑化されたお陰でこの地方は農業が盛んになった」と感謝していたそう。今は老木になっているが、龍丸の植樹した木の前で満丸氏と一緒に写っている（右か左の）子供のどちらかだそう。龍丸がシュワリック・レンジを初めて訪れた頃には危なくて立ち入りが出来なかったモルニー帯は、今では立派なリゾート・ホテルが建つほどに様相が変わったそう。

昨今日印両国は緊密な関係にあるが、はるか遠い国だった時代にブレることなくインドのために尽くした杉山龍丸を如何に後世に伝えていくべきか、私にとって人生の新たな宿題となりました。（了）

